

齋藤 梓・坂梨 唯・梨谷美帆・西井 開・日野 映・向井理菜〔編著〕

**ジェンダーにセンシティブでありたい
心理臨床家のために**

A5判並製・金剛出版

2025年9月刊

定価3,740円（税込）

評者＝松森基子（南青山心理相談室）



本書の題名は、一方には自分がジェンダーセンシティブであるかどうかには関心がない、あるいはジェンダーセンシティブでありたいとは思わない心理臨床家もいることを見据えつつ、それでも心理臨床家はジェンダーセンシティブであることが望ましいという主張を含む題名である。実際、本書には徹頭徹尾、誰も取りこばさないという姿勢が貫かれている。そして、編著者の一人の向井が述べている通り、「ジェンダーにセンシティブな心理臨床はジェンダーにもセンシティブな心理臨床」であることから、本書でいうセンシティブとは、違いに敏感であること、簡単に相手のことを分かった気にならないということを指していると読み取れる。また、臨床家はジェンダーセンシティブであることが望ましいというのは、本書が、心理臨床にとって、個人の内側で作用している力／内的現実だけでなく、外側から作用している力（例として女性はいかにあるべしという社会的圧力）／外的現実を考慮に入れることが重要だと一貫して強調していることと呼応する。さらに、ジェンダーをはじめとする社会問題や政治問題については、心理臨床家はそれらを積極的に議論するのみならず、面接室の中で培われた知見を社会に向けて発信し、社会改革の一端を担うことも視野に入れてはどうかとの本書の見解は、富樫（2023）らの紹介する海外の心理臨床家の姿勢に相通じるものがある。

さて、本書に触れてまず驚くのは、その類をみない構成である。最初は編著者らが先達と見なす臨床家2人へのインタビューで、両人がジェンダーセンシティブな臨床家へと歩みを進めていく過程が描かれる。次に編著者6人が、日々の臨床でジェンダーセンシビティが問われる場面でどう悩み、どう対処したかについて意見を交わす座談会が続き、さらに編著者の話し合いで浮上した被害者臨床、男性臨床といったテーマについて第一人者が自らの臨床を素材に省察する論説が続く。つまり、編著者および著者が一筋縄ではい

かない問題と真摯に取り組む様子を見ることを通して、読者が自ずと自分の臨床や社会問題に対する意識を高め、consciousness-raising groupに参加するのと同等の効果が生まれることを意図した構成である。個人的には、「アイデンティティかポジショナリティか」の論考に目が開かれる感があった。

それでは本書の読書体験は評者にどのような変化をもたらしたのだろうか。最初に起きたのは、他の臨床家と言葉を交わすなかで宮地尚子の名前が挙がり、意外と身近なところに同士がいると知る機会が増えたということだった。そして、正月に7年ぶりに訪れた米国で、今回は行き会えば挨拶を交わす、子どもに順番を守らせる、優先席には座らないといった普通の市民の良いマナーが、エスニシティその他にセンシティブな行動だとはっきり認識できるということが起きた。この認識が、マイノリティに深い安心感をもたらすことを私は身をもって体験した。

本書は読者の意識を変える一冊である。

●文献

富樫公一（2023）学会出版賞（小此木賞）受賞記念講演：日本で臨床をすること、海外で語ること。精神分析研究 67-3；295-305。